丹波質志鍾乳洞（圖版第一版附）

君塚康治郎

一、位置

質志鍾乳洞は京都府下船井郡三宮村字質志（シッシ）小字大崩（オホボケ）三十二番地區有地内にありて、山陰線綾部驛の東南東三里、下山の西北西二里五、胡麻の北西四里の地にあり。

園部驛より至らんには綾部に向ひ略直線的（北五十度西）に發達せる谷を通ずる福知山街道を進むこと六里にして三宮村に至る。之より北西に距る約三十町質志部落の盡くるところに、街道は二回大彎曲して榎峠にかゝる。此の第一の彎曲より南西に街道を離れ高屋川の支流（質志谷を南東に流下するもの）の最上流部を溯ること二町にして水源あり、水源は鍾乳洞の下部に位し一の伏流なり。

湧水は冬季にありても涸渴することなく、又夏季にありては冷きこと沿道隨一にして、從來通行者に賞用せられたり。只奥丹後地震の際は黄褐色に著しく混濁し容易に回復せざりしと云ふ。鍾乳洞は水源の南々西に當り之より高きこと百二十米許の地點にあり。

二、發見の次第

① 口碑

往年洞内に犬と雞とを放てるに犬は生死不明なれども雞のみは西北西四粁距れる大原神社境内に出で鳴けりと、此よりして大原神社まで連れる大洞窟ならむと。

② 質志部落民の注意

先年辻村七五三之助なる者風穴なりとて蠶種貯藏に利用せむと企圖せしも、洞内暗黑且洞門の極めて狹隘なりし爲め遂に利用するに至らざ

りき。

又現在の第一室に入洞せる者ありて、多數の鍾乳石を見たるも、氷柱と誤認し何等注意を惹起するに至らざりき。

③ 發見

昭和二年十一月三宮村字戸津川後藤與一なる獵師、何鹿郡綾部町山崎辰藏外一名と共に銃獵に出で、追へる狸の遁入せるを認め追うて、洞内に至るも狸の行方は知られざりしが、鍾乳石の美しく下垂せるを見たり。然れども發見者は之を種に利を得んと口を緘し語らざりき。

漸次噂は高まり遂に昭和三年一月二十五日村長北村一義氏小學校長的場正三兩氏入洞、第二室まで探檢し石灰洞なるを確かむ。噂は忽ち廣がり二十六日には入洞者增加し、且は鍾乳石を破毀する者さへありとて、質志區民の監視を要するに至れり。

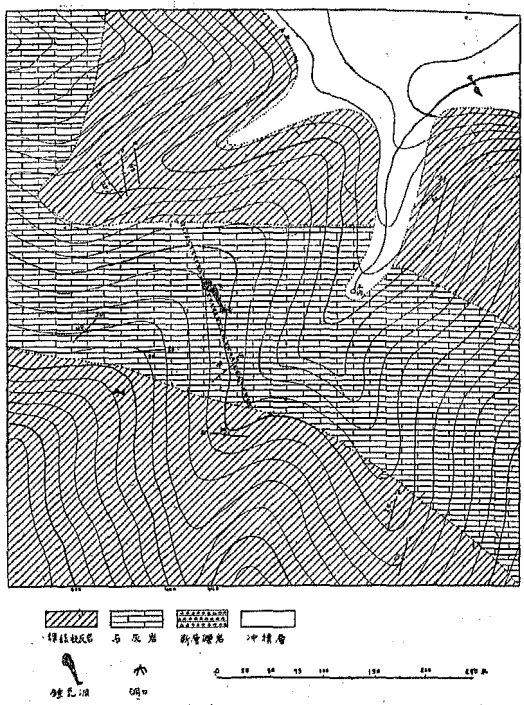
三、附近の地質

所謂丹波高原秩父古生層地域にして角岩頁岩輝綠凝灰岩石灰岩等相互層す。角岩は黑褐色にして直層面著しく明瞭にして走向斜傾歷然たりと雖も、褶曲飜轉甚だしく變化に富む。只北東部にありては、大體東北東より北々東に走り北西に三十度乃至六十度の傾斜を示す。

頁岩は露出少く角岩の如く成層面明瞭ならずして著しく風化す。走向傾斜角岩に似たれども傾斜は概して急なり。炭質頁岩は露出甚だ狹く厚さ數寸より數尺に止まる。只質志部落の中央部街道筋の河床には稍分布廣く、礫岩質にして徑數寸を有する角礫を含む。斷層礫岩を思はしむるものあり。

輝綠凝灰岩は分布最も廣く、南西部にありては質志部落の中部より、北東部は同部落の盡くるところより榎峠に至るまで、街道沿線全部を占め、石灰岩を隨伴す。然して北東部は節理著しく發達し、且風化著しく綠色のものも表面赤褐色を呈し、地質構造上著しき變動ありしを示す。南西部鍾乳洞附近のものは帶灰綠色を呈し風化も又前者の如くならず。兩者共に片理を有

第一圖



丹波地質志鍾乳洞附近地質圖

す東を示し、紡綞虫科のものを含む外海百合の莖部ブリオゾア等の化石をも含有す。

四、鍾乳洞の發達せる石灰岩塊（地質圖參照）

分布廣からずして北々西より南々東に亘る。レンズ狀をなす走向傾斜又不規則なり。四百米高距に於ける洞門より約五米攀ぢ上れば、北西—南東に走れる斷層礫岩を見らる。石灰岩、角岩、輝綠凝灰岩の碎片より成り巾、二米にして石灰岩塊を横斷す。然して部分的に此の礫岩と石灰岩との接面を見る時は、走向傾斜著しく變化に富むと雖も全體として北二十度西の走向を示し南西四十度乃至六十度傾斜す。

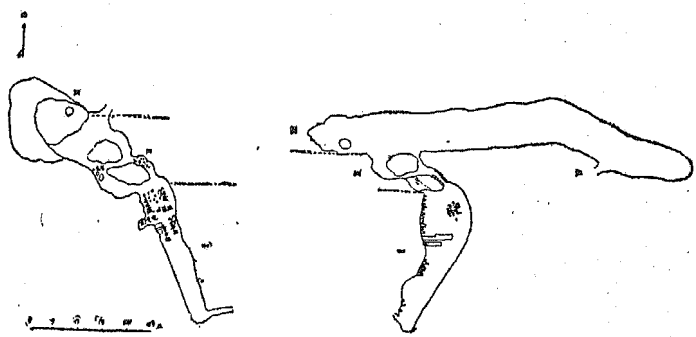
五、鍾乳洞（見取圖參照）

1、形狀及大さ

洞内は甚だ狹く延長百二十米を超えず、洞門する層碎岩なりと雖も前者は細粒なり。後者は肉眼的には火成岩狀を呈し、長石の大晶散點し一見斑岩狀を呈す。然れども各粒子層碎性にして、火山灰の集合なるを示す。又方解石の二次的成生あり。特に後者にありては其成生著しく表面に散點せる小白斑は皆方解石なり。

石灰岩は淡灰色を呈し其走向北々東より東北

第二圖



鍾乳洞見取圖

及四室に分る。

洞門は狹き裂罅にして、巾〇、八米高さ一米延長四米に達し其方向南八十度西にして、西南に二米下る。

第一室北二十度西の方向に亘れる室にして、三十五度の傾斜にて十九米下り、底部に達す。斜下部は巾三米、高さ四米、底部は長徑九米二、短徑四米、高さ八米に及び、大體杓子狀をなす。

第二室、第一室の底部北西端より西に四米の間三米許の高さまで上り第二室に至る。又北端より直接攀ぢ上る通路あれども甚だ狹隘なり。第二室は巾十米、長さ十五米、高さ四米に及ぶ室なれども、大なる岩塊轉落して餘り廣からず

第三室、第二室端より直下する縱洞を稱するものにして、上中下三部に分たる。

(上部)第二室面に續き高さ十五米許より下方に開き八十度の傾斜にて、直下二十三米八に及び、徑六米、下半は針金梯子にて攀ぢ下るを得

(中部)上部に次ぎ南十度西ノ方向に西に下る此間八米、傾斜六十度。

(下部)中部に次ぎ十一米東ノ方向に下る。其の傾斜六十度。

第四室、第三室の下部中部の堺より南三十度西の方向に南西に入ること二米、之より南二十度東の方向、南五十度西の方向、等に入る裂罅

部にして、是等は漸次上昇して、第三室上部にある横洞に連續するものならむも、未だ探檢せられず。

2、鍾乳石石筍及石柱

是等の發達せるは第一第二兩室に止まる。特に第一室には美はしきもの多數あり。

① 鍾乳石（版圖第一版上圖、下圖參照）

鍾乳石には其形二種あり。一は圓錐狀のもの一は平板狀のもの、之なり。前者は第一及第二室の一部に發達著しく、中央に孔を有し、同心的圓輪を有するものにて、垂直に下垂し、之等の成生後洞壁の變位を示さず。後者は厚さ二糎內外、廣さ三十糎二十糎內外のもの多く、洞壁より突出して隔壁樣をなせり。其の板面上には平行なる縱線多數ありて、岩體の裂罅に沿ひて生成せるを示し、決して鍾乳板には孔を認めず此の一種にして第一室の初めに發達するものは下緣に疣狀物並列し齒狀を呈す。五百羅漢と稱する部は、圓錐狀鍾乳石の大小多種集合せるを以て名づく。

② 石　筍

石筍は第一室底部に多く發達せり。其の形狀より地藏坂、六地藏、子安地藏、二見岩等と命名せり。就中二見岩は大なるものにして、周圍一米五に及ぶ。

③ 石　柱（圖版第一版上圖參照）

石柱は第一室のみに發達し、黃金柱（ワウゴンチウ）、日暮柱（ヒグラシハシラ）と稱し就中黃金柱は大にして、周二米長さ五米に達す。

3、落磐及乾濕

落磐は全洞通じて著しからず。只第三室にありては斷層角礫岩の稍大なるものあり。風化による粘土堆積し而かも陰濕にして、步行困難なり。始終水滴落下し泥濘足部を沒す第一第二兩室には石灰岩片を敷き步行に便せり。

六、成　因

附近の地質調査充分ならざるも鍾乳洞四近小域につきて見れば、其の走向傾斜著しく擾亂せり。又第二、第三、兩室の洞壁には斷層礫岩を隨伴す。第三室底にて石灰岩との接面北七十度

西、西北五十度の傾斜を呈す。洞内にては同礫岩の全體としての方向を知る能はざるも、洞外に於て見れば北二十度西、南西に四十度乃至六十度の傾斜をなし、第一室の方向も亦之に一致せり。

是等の事實より見れば、同區域にありては斷層礫岩の示す方向に平行せる弱線ありて、浸潤せる水の爲め此の弱線に沿ひて石灰岩は溶解し去られ、漸次空洞は廣められ、遂に洞窟を生成せしものならむ。

七、現在の施設

質志區民一致して種々の施設をなす。

① 洞内、洞門は扉を附し案内なくては出入し得られず。又第一第二兩室には石灰岩片を敷き歩行に便し、第一室の斜下部には丸木段を、第三室には上部二十三米八の間針金梯子を設け昇降に便せり。

② 洞門附近　現在石灰岩の突兀たる露出ありて寧ろ殺風景の觀あれども、附近一帶の雜木を伐採し、之に換ふるに櫻樹數千本を植林し、以て風致を添へむと計畫しつゝあり。

③ 入洞、洞内陰濕且泥濘の爲め丹波のタチカケと稱する坑内着の加き上下衣を作り、入洞者に便す。區民案内蠟燭並タチカケ使用料として一人金三十錢宛を徴集す。

八、結　言

延長百二十米を超えず規模甚だ小にして既に知られたるものと比肩するに足らずと雖も、伏流より見れば探檢により或は洞内は延長する見込あり。然かのみならず第一、第二兩室には鐘乳石、石筍及石柱の美はしきもの多數ありて、京都府下は勿論、近隣にかゝる天工物のあるを未だ聞かざれば、特に保護を加へ以てその破毀を防止し永く保存するの要あるべし。（終）